第４章　まとめ

第１節　古代官道研究の現状と課題

１　古代道研究の現状

兵庫県における古代道の研究は、1960年代の今里幾次[1]や高橋美久二による播磨国の駅家所在地の研究成果〔今里1960、高橋1968〕によってスタートした。この成果を受けて、続く1970年代から1980年代になって歴史地理学の分野の木下良や吉本昌弘により山陽道のルートの解明が進んだ〔木下1976、吉本1985a・1985b〕。考古学の成果によって駅家遺跡の推定地を絞り込めたことが、これらをつなぐことで道路痕跡をみつけるという歴史地理学の手法により古代道跡を発見することを容易にするとともに、お互いの研究成果がそれぞれを補完しあってそれぞれの正しさを裏付けた好例である。これらの研究によって、古代山陽道は、平野部をほぼ直線的にむすんだものであることが明らかにされたのである。

しかしながら、想定される道路跡に対して、実際に発掘調査により遺構が確認された例は多くない。これまでの調査例としては、山陽道では、たつの市小犬丸遺跡東側で幅７m以上の道路面が〔山下1989〕、上郡町落地遺跡八反坪地区では幅10.2～10.3mの道路跡が〔島田2005〕、明石市古代山陽道跡福里地点では12mと15m以上の道路跡が〔稲原2003〕、辻ヶ内地点では幅８mの道路跡が〔稲原2008〕それぞれ検出されているのがすべてである。周辺に目を向けると、山陽道については、高槻市の嶋上郡衙跡や郡家今城遺跡で、８世紀の半ばまでに整備されたと考えられる路面幅10m～12mで石や瓦と粘土を突き固めた道路が確認されており、さらに９世紀半ば～後半には路面幅５～６mに縮小されていることがわかっている〔宮崎1994〕ことから、道路整備の初期段階では10～12mの規模であったものが、平安期に６～８m程度に狭められたと考えられている。

東山道や東海道で確認されている前期駅路が皆12m幅であることを考えると、第１級国道である山陽道が10～12mと幅を持ちながらではあるが、やや狭いことが気になるが、吉本の歴史地理学の立場からの研究によると、山陽道の余剰帯は18mであり、山陰道や北陸道の23mよりも狭いが、これは山陽道の造営年代が天智朝にさかのぼるもので、基準尺に高麗尺を用いたためではないかとされている〔吉本2005〕。今後の検証が待たれるところである。

これらの道路跡に共通するのは、従来の文献研究では過小に評価されていた古代道が、近世の街道の規模を大きく上回るものであったことである。また特に山陽道では、その設置に際して、平野部では峠と峠の間をむすんだ直線を基準としており、結果として郡単位の条里型地割りの基準線ともなっていることも明らかとなっている。

なお、基本的に瓦葺きの施設を持つと考えられる山陽道の駅家と違って、おそらく瓦葺きではない山陰道、南海道、美作道など兵庫県内の他の古代道では、駅家の位置は地名からおおよその場所が推定されているだけで、まだ駅家遺跡を特定するには至っていない。道路遺構としては、佐用町長尾・沖田遺跡佐用郡衙前で幅3.5mの推定因幡道〔兵庫県教委1991b・1993b〕が、丹波市七日市遺跡氷上郡衙別院前で幅10～11mの推定丹後道〔兵庫県教委1991a・2004〕が、そして朝来市加都遺跡では路面幅6.0～6.8mの古い段階と幅4.2～5.4mの新しい段階の推定但馬道〔兵庫県教委2005・2007〕が確認されるにとどまっている。このうち加都遺跡では、段丘上の高い部分では側溝を掘っただけであったが、谷間の低地部分では石や木とともに盛土をした遺構が確認されているのは、盛土工法による古代道としては県内唯一の事例である。なお、これらの道路については、そのルートもまだよくわかっていない。

表12　文献に残る播磨国の駅家

文献	野磨 やま	高田 たかだ	布勢 ふせ	大市 おうち	草上 くさのかみ	佐突 さつち	賀古 かこ	邑美 おうみ	明石 あかし
風土記（713ころ）				邑智			賀古		明石
続日本紀（729）	山陽道諸国の駅家を造らんが為に駅起稲五万束を充つ								
太政官符（769）									
続日本紀（773）					草上駅				
類従三代格（807）	9駅から5匹ずつ減ず								
日本後紀（839）						佐突駅旧建立			
後拾遺往生伝（866）							賀古駅北に教信住		
菅家文草（888）									明石駅駅楼
菅家後集（901）大鏡									明石駅駅長
延喜式（924）	野磨	高田	布勢	大市	草上		賀古		明石
枕草子（996ころ）	山の駅								
大日本国法華経験記（1040ころ）	野磨駅								
時範記（1099）					高草駅				明石駅

2　駅家研究の現状

（1）山陽道の駅家推定遺跡

兵庫県内の駅家については、今里幾次と高橋美久二による山陽道の駅家研究が進んでおり、全国的に見ても他の追随を許さない〔今里1980、高橋1995〕。また、近年では岸本道昭や木本雅康により一般向けの入門書も刊行されており〔岸本2006、木本2008〕、これまでの研究成果を容易に知ることができるようになっている。ここでは、紙幅に限りがあるため詳しくはふれないが、特に課題となる点について触れておきたい。

「延喜式」によると兵庫県内の山陽道には９駅の存在が確認できるが、高橋美久二の研究により、廃止された２駅を加え、もとは11駅が置かれていたことが明らかとなっている。これらの駅のうちで播磨国に存在した９駅に関連する文献の記録を整理したものが表12である。これらの記録から、おおよその遺跡の所在場所は検討がつくのだが、実際の遺跡をあてるとなると、まだ困難な点が多い。本報告書第１章で駅家推定地の分布調査成果の概要をまとめてあるが、駅家遺跡の所在場所を確定できるものは、山陽道以外では皆無であるのは無理もないとしても、実はまだ山陽道でも多くないのである。兵庫県内の山陽道に設置された駅家推定地の遺跡を東から順に検証してみよう。

摂津国では２駅が存在する。葦屋駅は、芦屋市阪急芦屋川駅西側の芦屋川西岸付近に存在すると考える説が有力である。古代寺院である芦屋廃寺周辺にあって官衙的色彩の強い遺跡としては、三条九ノ坪遺跡や寺田遺跡、月若遺跡、津知遺跡、あるいは駅銘墨書土器が出土した神戸市東灘区深江北町遺跡が候補地となっているが、いずれも駅館院など中枢部分の遺構は見つかっておらず、決め手を欠く。

須磨駅は、神戸市須磨区板宿付近にあると考えられている。道路側溝ではないかと考えられる遺構や官衙的建物跡などが見つかっている大田町遺跡が唯一駅家に迫る遺構であるが、先の深江北町遺跡同様、内容的には付帯施設であり、駅館院などの駅家本体の施設とは考えられない。

播磨以西の山陽道諸国ではまとまって瓦が出土することから所在場所を推定することが可能なのであるが、これら摂津国の駅家遺跡については、まとまった瓦出土地がなく、蘆屋、板宿などの地名が示すような草葺きや板葺きなど、瓦を使用しない施設であった可能性も否定できない。続日本紀729年の記

述も「為造山陽道諸国駅家」としており、厳密に言えば畿内に属する摂津国を含んでいないことも気になるところである。ただ、どちらも六甲南麓に所在する遺跡であるため、平安時代以降の土砂の堆積量は多く、地下深く埋没しているために瓦が発見されにくいだけである可能性も高い。

播磨国では９カ所の駅が存在していた。明石駅は最も記録に登場する駅である。所在場所は、播磨国府系瓦が出土し官衙風建物が建ち並ぶ吉田南遺跡説と、太寺廃寺付近もしくは明石公園付近の大きくはふたつの説がある。このうち吉田南遺跡は山陽道から離れすぎている上に、内容的には明らかに郡衙遺跡であることから、やはり太寺廃寺周辺の舌状に張り出した段丘上に所在していたと考えるのが無理がないであろう。次の２駅は、後述するとおり、（仮称）邑美駅は明石市魚住町の長坂寺遺跡、賀古駅は加古川市野口町古大内遺跡で確定であろう。

佐突駅は、姫路市別所町の北宿遺跡が有力とされている。確かに鎌谷木三次の記録〔鎌谷1942、鎌谷引用は以下同〕や採集されている瓦から有力な候補地であることは間違いないが、平地の中にあり、やや地形的に他の駅家の立地場所との違いが気になる。小犬丸遺跡と小犬丸中谷廃寺との関係のように、寺院跡である可能性も考えておく必要があるかもしれない。

草上駅は、かつて姫路市本町遺跡や辻井廃寺付近に想定されたことがあったが、前者は播磨国府関連の遺跡であることが明らかであり、後者は塔心礎を持つ明らかな寺院跡であるとともに、山陽道から離れてしまうことから、近年では山陽道沿いにあり播磨国府系瓦がまとまって出土した今宿丁田遺跡説が有力となっている。しかし、遺構は全く検出されていない上に、立地的に平地の真ん中にあること、さらには距離的に佐突駅と大市駅の中間から大きく西にずれており、佐突駅が廃止された後はさらにその差が著しくなることから考えると、位置的に無理があるように思われる〔山下1994〕。やはり、播磨国府近辺にあった可能性が高いのではないだろうか。

大市駅は、高橋により姫路市大市中の向山遺跡に比定されている。確かに、採集資料や立地的には無理がないが、現在想定されている山陽道から離れすぎているため、山陽道のルート設定自体を見直す必要があるように思われる。続く布勢駅は、たつの市揖西町の小犬丸遺跡で確定している。

高田駅は上郡町神明寺遺跡とされており異論がでていないが、当該遺跡は寺院跡である可能性が高く、別の場所を考える必要がある。今回の分布調査で新たに国府系瓦散布地を発見しており、立地的にも無理がないことから、今後の調査が期待される。

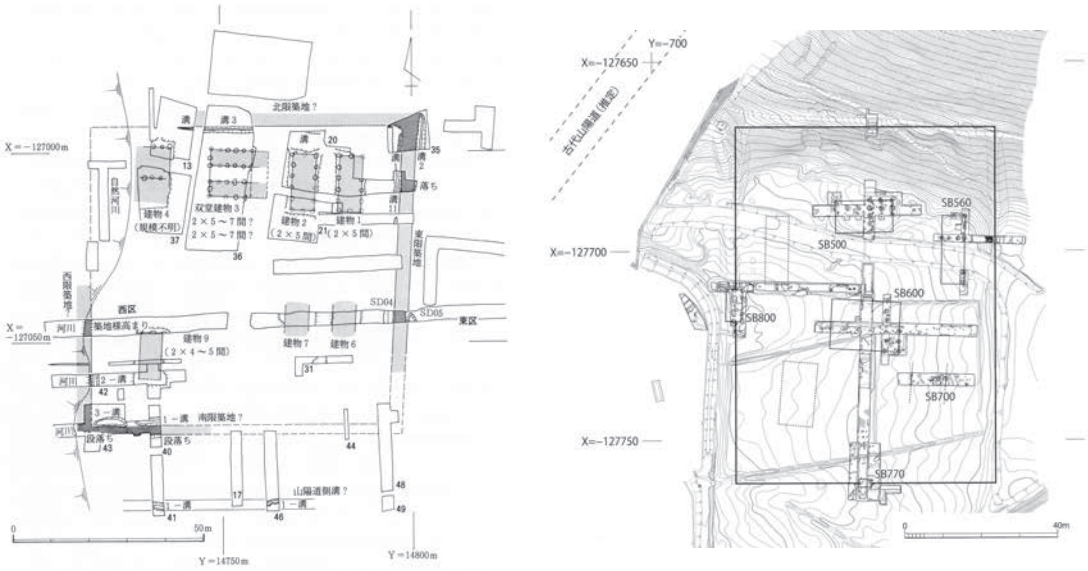
野磨駅は上郡町落地遺跡飯坂地区については間違いがない。ただし、前期駅家と考えられている八反坪地区については、まだこの遺構を駅家と断定できる根拠はないのではないだろうか。この場所が播磨国の西端であることなどから、関とはいわないまでも、国境への入国にともなう儀式を行うなど、何らかの役所関連施設である可能性も含めて、今後の事例を待つ必要があると思う。

（２）駅家遺跡であることが確実となった４遺跡

次にこれらの遺跡の中から、ほぼ駅家であることが確実となった４つの遺跡についてみてみたい。

①**小犬丸遺跡（布勢（ふせ）駅）** たつの市揖西町小犬丸

鎌谷により古瓦散布地として知られ小犬丸廃寺とされていた遺跡であったが、今里や高橋の研究〔今里1974・1978、高橋1968・1990〕により山陽道布勢駅と推定されていた遺跡である。1983年には駅家推定地を横断する県道拡幅に伴い発掘調査が行われ、瓦葺建物跡や基壇、築地塀跡などの存在が確認されていたが〔別府1987〕、1986年に駅家推定地の東側の湿地で見つかった井戸の周辺から「駅」銘墨書土器や「布勢駅」木簡などが出土し、日本で初めて駅家跡と確定した〔山下1989〕。この発見が契機とな



第33図 小犬丸遺跡（左）と落地遺跡の駅館院配置図

って範囲・内容を確認するための調査が行われることになり、その後数年にわたる調査の結果、約80m四方を築地塀で囲まれ、内部には７棟の瓦葺き建物が並んでいたことが判明した。築地塀や建物はすべて瓦葺きで柱は丹塗り、壁は白壁であったと考えられる。中心建物は２間×７間の建物２棟を接して建てた双堂と推定されている〔岸本1992・1994〕。これらの成果は、日本で初めて駅家本体の様子を明らかにするとともに、高橋が文献をもとに推定した山城国山崎駅の構造〔高橋1986〕が駅家に共通する基本様式であり、駅家本体が駅館院をなしていたことも裏付ける結果となった。また中村太一は、この成果をもとに全国で初めてCGにより駅館院を復元しており、外国使節をもてなす迎賓館としての機能を持っていたとされる山陽道駅家の華やかなイメージがよみがえった〔中村2000〕。

②**落地遺跡（野磨（やま）駅）** 赤穂郡上郡町落地

・八反坪地区

1990年のほ場整備の際に、野磨駅家推定地から南西に約300m離れた田んぼの中で、塀で囲まれた区画内にコの字形に配置された掘立柱建物３棟が検出された。区画の前には両側に側溝を持った幅約10mの山陽道の道路敷きを検出しており、道に面する位置には掘立柱の八脚門が配置されていた。遺構から出土する遺物の年代が７世紀末から８世紀初頭であることから、瓦葺き以前の初期の駅家ではないかとされ、先の小犬丸遺跡とともに全国的にも注目された〔島田2005〕。

・飯坂地区

鎌谷によって落地廃寺とされていた古瓦散布地において、2001年に開発計画が持ち上がり、樹木が伐採されたところ､驚くべきことに礎石を伴った建物基壇と背後の斜面にまで繋がる築地塀跡が出現した。上郡町教育委員会によりさっそく調査が開始された結果、南北92m、東西68mの長方形の範囲を築地塀が囲んでいることが明らかとなった〔小田2006〕。築地に囲まれた空間の中には七間四面の後殿跡の全容を確認したほか、双堂形式の中心建物など瓦葺き礎石建ちの建物6棟が立ち並んでいた。これらの遺構が良好に残されていたことは驚きであったが、もっと驚いたのは、築地塀の北部は山の斜面にまで登るように連なっていたことである。また、予想外の西側で、駅家では初めて門の遺構がみつかったのだが、立派な八脚門には頑丈な唐居敷が使われていたことも驚きであった。大日本法華経験記や今昔物語

に大蛇のすむ駅として、また枕草子には趣のある駅としてとりあげられた野磨駅の実態がこれほどまでに残されていたことなど、とにかく驚きの連続であった。これらの遺構は八反坪地区の遺構や道路跡とともに、平成18年に駅家遺跡としては全国で初めて国史跡に指定された。

③**古大内遺跡（賀古駅）**加古川市野口町古大内

鎌谷が古大内廃寺とし、高橋により賀古駅家と推定されていた遺跡である〔高橋1978〕。出土瓦は今里により播磨国府系瓦の一種古大内式の指標ともなっている。詳細は次節の中村報告を参照していただきたいが、今回の発掘調査により、ほぼ賀古駅家であることが確定したといっていいだろう。

④**長坂寺遺跡（邑美駅）**明石市魚住町長坂寺

鎌谷が長坂寺廃寺跡とし、高橋美久仁氏により記録に残らない廃止された駅家跡と推定され、仮称邑美駅（播磨国風土記では「大海」）と命名された遺跡である。今回の調査で現地に一辺約80mの正方位を向く方形区画が残っていることが初めて確認でき、レーダー探査の結果、遺構の存在が確認された。726年に聖武天皇が行幸した印南野邑美頓宮にあたるのではないかとも考えられている〔高橋1990〕。

（3）駅家遺跡に共通する要素

駅家跡であることがほぼ確かな遺跡は以上の4遺跡であるが、これらの遺跡に共通する要素を抜き出せば、駅家遺跡の標準とでもいうべきものが見えてきそうである。そこで、これらの4遺跡について、これまでの調査成果をもとにその要素を比較整理したのが表13である。

これらの調査成果から駅家の共通要素を抽出してみると次のようになる。

・築地で囲まれた　辺80m程度（270尺＝約81mか）の正方形区画（＝駅館院）を標準とする。地形的にとれない場合は、約6,400㎡の面積を確保する。
・築地は瓦葺き、粉（白土塗り）壁、丹塗り柱とする。
・山陽道に面した側（南・西・東）に表門を置く。
・表門は格式の高い八脚門で、唐居敷を用いる。仕様は築地と共通。
・駅館院の内部には6～7棟以上の瓦葺建物を置く。建物の仕様は築地と共通。
・中心部分には儀式、接待の場として使用すると考えられる双堂形式の建物を置く。
・当初は掘立柱建物であったが、奈良時代に外国使節向けに瓦葺に建て直した。

表13　駅館院の構成要素比較

遺跡名		小犬丸	落　地	古大内	長坂寺
駅　名		布　勢	野　磨	賀　古	（邑美）
立　地		谷間（扇状地）	谷間（扇状地）	段丘上突端部	段丘上突端部
規模（東西×南北）		約80m×80m	68m×94m	約80m×80m	約80m以上×80m以上
方　位		ほぼ正方位	ほぼ正方位	N8°W	ほぼ正方位
築地	有無	有	有	有	未確認
	瓦葺き	瓦葺き	瓦葺き	未確認	未確認
	丹塗り	有	有	未確認	未確認
	白土	有	有	未確認	未確認
門	表門（形式）	未確認（推定南門）	西門（八脚門）	東門（八脚門）か？	未確認
	唐居敷	未確認	有	有	未確認
建物	瓦葺き	有	有	未確認	未確認
	棟数	7棟以上 （うち1棟は双堂）	6棟以上 （うち1棟は双堂）	未確認	未確認
主要瓦の形式		古大内式	古大内式	古大内式	長坂寺式？
山陽道との位置関係		南面を東西に通過	西北側を斜めに通過	北東側を斜めに通過	南西側を斜めに通過

・まだ確認された例はないが、文献に見える楼閣建築もあった可能性がある。
・そもそも駅家は兵部省の管轄であり、谷あいの高台や丘陵の端部など、ある程度防備を考えた場所を選定して置かれたと推定できる。

以上の共通要素が文献に見える駅家の「定様」である可能性が高いと考えていいのではないだろうか。今後、上記の条件を満たす遺跡を抽出することで、所在の不明な駅家の場所や内容を明らかにすることができるだろう。

3　研究の課題

道路研究の課題

基本的なこととして、以下の点を明らかにしていく必要がある。第１に官道がどこを通っていたのか、第２に整備されたのはいつか、第３にどれぐらいの規模であったのか、そして、時代によって規模や場所に変化がないのかという３つの課題である。以上の政治的・経済的側面からのアプローチとともに、どのように造られていたのかという、技術上の課題をあわせて明らかにしていく必要がある。

駅家研究の課題

まず第１に、駅家はいつ設置されたのかということである。近年の研究成果によると、古代官道が整備されたのは白村江の敗戦（663年）以後の天智朝か天武朝とされており、駅制が整備されるのもこれ以降であろうが、大宝律令制定（701年）ころまでには成立しているであろう。道路整備、圃場整備とともに駅家建築など、同時進行で進めるには膨大な数の技術者・職人が必要であったであろう。その実態を知るための手がかりがほしいところである。また、設置にあたって、駅評などの前身施設があるのかどうかも検討課題である。

第２に、瓦葺き駅家はいつ成立したのかということである。高橋は729年の続日本紀の記録「為造山陽道諸国駅家充駅起稲五万束」や藤原武智麻呂『家伝』を瓦葺き駅家設置の根拠と考えたが〔高橋1982、2005〕、播磨国府系瓦の形式からみて奈良時代末～平安時代初めとしか考えられないとする今里〔今里1992〕との間で大きな年代のへだたりがある。岸本道昭は、政府の目標とはうらはらに事業施工は遅々として進まなかったと結論づけているが〔岸本2006〕、はたしてそうであろうか。高橋も指摘するように、駅制衰退期にあたる奈良時代末～平安時代初めに瓦葺き化を進めたとはとても考えにくく、やはり729年以降速やかに着手され、比較的短時間で瓦葺き化は進められたと考えたい。考古学的調査で明らかにするには条件的には難しい点が多いが、今後明らかにする必要がある重要な課題である。

第３点目は、駅家は駅館院だけで成り立っているわけではなく、周辺の雑舎群と一体的に機能するものであるため、これら周辺施設はどのようになっていたのかということである。駅家経営に必要なものとしては、駅長の執務室や厩舎、駅子の休憩場所、来客に提供する食事の炊事場、井戸、駅起稲を保管する倉庫などが必要である。この点については、小犬丸遺跡では駅館院の外に掘立柱建物や井戸が確認されているほか、加古川市坂元遺跡では駅戸の集落と考えられる建物群がみつかっているが、それぞれの遺構と具体的な用途を結びつけこれを証明することは難しい。駅館院や道路遺構と違って、どこに何が存在しているのかまったく手がかりがなく、調査には様々な課題があるが、今後は駅館院の周辺にも意識を持って計画的に発掘調査のメスを入れる必要があるだろう。

註

（１）以下、敬称については略させていただきます。